

北海道胆振東部地震における当院の医療対応

水野ルリナ[†] 藤岡 純第73回国立病院総合医学会
(2019年11月8日 於 名古屋)

IRYO Vol. 75 No. 3 (256–259) 2021

要旨

平成30年9月6日未明に発生した北海道胆振東部地震では、北海道全域にわたる停電（いわゆるブラックアウト）が発生した。震源から遠く離れた札幌市内では地震そのものにより直接的に外傷を負った患者はほとんど発生しなかった一方で、停電、断水の影響により、人工呼吸器、NPPVを装着した患者、かかりつけ病院で透析治療が受けられなくなる患者等病院での診療継続、また在宅医療が不可能となった患者が多数発生し、これらが急性期の救急車搬送や病院間搬送の大多数を占めることとなった。また透析に関しては前日に通過した台風21号により一部地域で停電が生じていたことも、さらに状況を悪化させた。国立病院機構北海道医療センター（当院）も外部送電はストップしたものの自家発電機にて停電に対応し、ライフラインに障害は生じなかった。札幌市の災害基幹病院のひとつとして対応し、近隣を中心とした連携医療機関からの一時転院、および人工呼吸器装着患者23名、維持透析患者を115名、計138名を2日間で受け入れた。その他ERでの災害関連の傷病者の診察を行った。当院DMAT隊も派遣され、地域の病院の稼働状況と医療を必要とする患者状況の調査集計や病院間患者移送を行った。その他DMAT事務局からの依頼で厚真町とその周辺の避難所の稼働状況や衛生状況の調査の実施、J-SPEEDの入力作業に携わった。日頃から院内災害活動と共に、地域医療、福祉機関との連携を図り、災害時の対応・連絡方法の確認や情報共有をすることが課題である。

キーワード ブラックアウト、在宅医療、情報共有

はじめに

北海道胆振東部地震は平成30年9月6日午前3時7分、北海道胆振地方中東部を震央として発生した地震である。これは北海道で統計上初めて“震度7”を観測した。土砂崩れや停電など、さまざまな二次的被害が発生したことで、当時道内は大きな混乱に見舞われた。中でも苫東厚真発電所の停止、送電線故障にともなう風力発電所、水力発電所の停止も重

なり午前3時25分、道内全域約295万戸が停電「ブラックアウト」となったことが最大の致命傷となった。ブラックアウトの発生は、電力体制のスタート以来、初めてのことで、東日本大震災によって東京電力・福島第1原子力発電所事故が発生し、津波で太平洋沿岸部の発電所が被災した時でさえ、ブラックアウトはおきなかった。そのような状況の中での医療対応、国立病院機構北海道医療センター（当院）の位置する札幌市内でおきた現状を報告するととも

国立病院機構北海道医療センター 救命救急センター †看護師
著者連絡先：水野ルリナ 国立病院機構北海道医療センター 救命救急センター
〒063-0005 札幌市西区山の手5条7丁目1番1号

e-mail: syura0423@gmail.com

(2020年7月27日受付, 2021年2月19日受理)

Medical Responses of Our Hospital in the 2018 Hokkaido Eastern Iburi Earthquake

Rurina Mizuno and Jun Fujioka, NHO Hokkaido Medical Center

(Received Jul. 27, 2020, Accepted Feb. 19, 2021)

Key Words: blackout, home medical care, information sharing